



気になるあいつ
わかぎゑふ

双葉社

和もの

東京に2週間ほど来ている。「Bugs Under Groove」という男性7人で組んでるダンスユニットのチームがあつて、彼らのこの夏の公演の演出を引き受けたからだ。

だからといってダンスの振り付けをしているわけではない。彼らが今回は芝居をするので、その脚本を書き、演出をしている状況だ。もちろん、こっちは芝居畑の人間なんで、たとえ相手がダンサーであろうとも、芝居のダメ出ししかできない。今回のいわゆるセッションがどうなるの

かは本番でのお楽しみということになるだろう。

ところで、そんなこんなで、東京で稽古しているので、その日借りて
いる稽古場を点々としている。東京はダンスや芝居の稽古場がふんだん
にある。お金はかかるかもしれないが、大阪にはそんなものもほとんど
ないので、羨ましい限りだ。

その中でも大井町というところにあるダンススタジオに行った帰りだ
った。東京の中でも都心からちよつと外れた感じの普通の町なのだが、
ここですつごく面白い一品を置いている呉服屋を見つけた。

写真は男物の下駄である。ごらんのように鼻緒はまだ付いてないが、
左右の下駄を揃えると龍の焼印が施されているのが、お分かりだろう
か？

しかも、この下駄は左右の焼きが違う。縦と横に木目が走ってて、同
じ木でも、わざと縦横別々に切り出してあることがわかる。

なんとお洒落なことではないか。関西では女物の和ものは多いのだが、男ものときたら、ひどい状況だ。粋なデザインなんてほとんどない。そこから考えると都心を外れた町に、こんな粋な下駄が売られていること自体が羨ましい。

他にも私の夏の半帯を買ったのだが、黒の帯に何本か白いラインが走って、一番端つこにドクロの絵が入っていた。なんとまあ着物の上にもドクロの帯：すごく偏ってはいるが、飛び切りするどいセンスでもある。聞けば若い女性店長が仕入れてくるのだとか。彼女は帯を買った日に「これ一回着てくださいよ」などと言いつつ、自分のお気に入りの商品を見せてくれた。

蝙蝠がわざと半分しか見えないようなデザインの中襟。サイコロの絵が描かれた帯あげ（これは買いました）ボタンを絵をあしらった帯：などなど、なかなか売っている店も少ないよと、声をかけたかったほどだ。東京にはこんな和を大事にする傾向があちこちに残っている。なんで

も壊すことがいいと思っ
ている関西人は、そう
いう江戸の粋を少々学
ばなくてはならないだ
ろう。

【著者略歴】

わかぎあふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より故中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーII」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『イブの抜け穴』『大阪弁の詰め合わせ』など多数。
